〔資料・研究ノート〕

戦場ジャーナリストの「原点」・岡村昭彦の被差別部落体験を聴く

水野　孝昭[1]

要　約

戦場ジャーナリストの「原点」―岡村昭彦と被差別部落の人々

ベトナム戦争報道で米国のグラフ誌『LIFE』など国際的に活躍した岡村昭彦の原点は、若き日の被差別部落での住み込み体験にあった。『南ヴェトナム戦争従軍記』がベストセラーになる以前の彼を知る人々から 2016 年に聞き取りした記録をもとに、部落での“オルグ”としての岡村の姿を再現する。ムラの人々とのふれあいが、その後のベトナムの戦場や解放区の取材で彼のジャーナリズム精神を支えていたことがその著作から確認できる。「一匹オオカミ」といわれた取材も「弱者からの視点」で一貫していた。戦後という時代の波にもまれた若者が「キャパの後継者」と評価されるまでの軌跡をたどりながら、当時の彼を知る人々の貴重な証言を紹介する。

[1] 神田外語大学外国語学部国際コミュニケーション学科教授。

日本のジャーナリズムにとって 1960 年代のベトナム戦争の報道は一時代を画した意義を持つ。「戦場ジャーナリスト」の先駆けとして、いち早くベトナム報道で国際的な注目を浴びて、その後も世界各地で独自の取材を続けたのが岡村昭彦（1929～1985）＝写真＝だ。

撮影・石黒賢治 Copyright©2002-2021 岡村昭彦の会 All rights reserved.

そのデビューは華々しい。米国のグラフ誌『LIFE』の 1964 年 6 月 12 日号で「ロバート・キャパを継ぐ」と紹介されて、南ベトナムの最前線で撮影した写真が一挙に掲載された。

その後も『毎日グラフ』『朝日ジャーナル』などに戦場レポートを送り続けて、1965 年に発行された著書『南ヴェトナム戦争従軍記』（岩波新書）はベストセラーとなった。岡村にあこがれ、カメラを手にベトナムを目指した若者の中から、その後にピュリッツァー賞を受賞した沢田教一はじめ多くの「戦場カメラマン」が生まれていった（青木　1981 年）。

「岡村昭彦の会」のホームページは、以下のように紹介している。

「1929 年 1 月 1 日名門に連らなる海軍将校の長男として生まれ、47 年東京医専

中退、戦後の混乱期をさまざまな仕事をして乗り越え、34 歳の時に初めて南ヴェトナム戦争を取材、翌年「LIFE」に南ヴェトナム前線での写真が 9 頁にわたり特集されて一躍世界の OKAMURA となる。

65 年の『南ヴェトナム戦争従軍記』（岩波新書）はベストセラーとなり日本人の目を東南アジアの戦争に向けさせた。その後二度の長期間の南ヴェトナムへの入国拒否にあいながらも、北アイルランド紛争、ビアフラ戦争、エチオピアの飢餓などを取材、その他数々の世界史の現場に立ち、国際フォトジャーナリストとしてカメラとペンによりわれわれはどんな時代に生きているのかという視点から、21 世紀にも未解決の戦争と平和の問題を鋭く訴え続けた。フリーランスとしての生涯は常に弱者の側に身が置かれてあり、晩年は生命倫理やホスピスに取り組んでいたが、1985 年 3 月 24 日敗血症のため死去。享年 56 歳。」

東京都写真美術館で 2014 年に開催された写真展「岡村昭彦の写真　生きること死ぬことのすべて」の紹介も、「岡村昭彦の軌跡は、われわれはどんな時代を生きているのかを鋭く問いかけ続けてきました。それは「日本」という枠組みを超えて、「世界史」のなかを日本人はいかに生きていくべきかを問いかけているといってもいいでしょう」と述べている。
（同館 HP　https://topmuseum.jp/contents/exhibition/index-2242.html)

米国の人種問題、ビアフラ内戦、アイルランド紛争など世界各地を取材し、テーマも反公害から環境問題、バイオエシックス（生命倫理）やホスピスへと変わっていった。いっけん多様にみえる取材テーマでも、そこには「弱者の側に身を置く」という一貫した精神が刻まれている。（高草木、平野　2017 年）

グローバルな視野と時代感覚をもち、相手に共感のまなざしを抱いていたジャーナリストといえるだろう。

米『LIFE』（64 年 6 月 12 日号）に掲載された最初のルポ写真。右の写真は「莚に包まれたわが子を抱く南ベトナム政府軍兵士（1964.4）」
Copyright©2002-2021 岡村昭彦の会 All rights reserved.

1962 年に東南アジアに渡航する前年まで、岡村は東京近郊の被差別部落に住み込んでいた。当時 31 歳。九州の筑豊で「戦後最大の労働争議」といわれた三井三池炭鉱争議に参加した後、東京の町工場で働き、そこで被差別部落の人たちと出会ったことが、“ムラ”に住み込むことになるきっかけだった。安保闘争を頂点とする「政治の季節」の大きなうねりに包まれていた時期だったが、岡村はデモや集会ではなく、工場での厳しい労働と被差別部落での体験が、自分の生き方に決定的な影響を与えた、と以下のように述べている。

「部落での生活は約一年半にすぎなかったが、私の一生を変え、一生を支えるほどの貴重なことを、私はここで学んだ。皮革工場での苦しい労働と生活を共に

しながら、私は観念によってではなく、タンニンの臭気のしみこんだ裸の肉体のぶつかり合いによって、労働者の連帯と解放のエネルギーをつかむことができた。そのおかげで私は、タイでも、ラオスでも、このヴェトナムでも、外の者たちが入っていけない底辺深く入りこみ、かけがえのない友人を発見することができたのだ。」

「私の心は、いま、未解放部落から筑豊へ、筑豊からヴェトナムへ、ヴェトナムから未解放部落へと、血管のように一本に結ばれていることが、はっきりと感じられる」（『続南ヴェトナム戦争従軍記』）

岡村に強烈な印象を残した「部落での生活」とは、どんなものだったのだろうか？

どんな経緯で彼はこの部落にやってきて、なぜ出ていったのだろうか？

彼を受け入れた部落の人たちには、彼はどんな存在だったのだろうか？

こうした疑問について、一般社団法人・千葉県人権センターの協力で「語り継ぐ研究会」（主宰・福岡安則・埼玉大名誉教授）の聞き取りの一環として、岡村が住み込んでいた部落で当時を知る人たちから話を聴く機会を得られた。2016年6月12日に行われたこの聞き取りと福岡らによるそれまでの聞き取り記録を通じて、一人の若者が動乱の東南アジアに飛び込んで国際フォトジャーナリスト「OKAMURA」になるまでの軌跡をたどってみたい。

○「モテモテだった恩人」

都心からほど近い駅の改札を出ると、同センター常務理事の鎌田行平さんが迎えてくれた。駅前の街道を抜けて細い道を入っていくと、道の突き当りにこぢんまりとした平屋の集会所がある。

この日、集会所のテーブルを囲んだのは、当時を知る6人だった。年齢は80代

から40代までさまざまだ。女性のNさん（85）は1931年生まれで、参加者の中で最長老の生き字引のような存在である。

岡村がムラに住み込んでいたころに接していた人々の証言を記録している手がかりが、2006年に刊行された『千葉県A市・B町における同和教育実態調査報告書』である（以下、『報告書』）。福岡と黒坂愛衣（現東北学院大学准教授）らが地域の住民を対象に3年がかりで行い、黒坂が執筆を担当した423ページにおよぶ綿密な聞き取りである。ただ、調査の趣旨は同和教育の実情なので、ムラにいた岡村については回想として断片的に触れられているだけだ。

この『報告書』で、Nさんは「モテモテだった岡村昭彦」について語っている。（《聞き手F》とあるのは福岡である。）

「《聞き手F》 岡村昭彦さんは、［のちにM地区の支部長をやった］Yさんとこいたんだっけ？
《Nさん》 ああ、いたよ。それで、ご飯は、ほら、みんなが……。モテモテだったから、あの人は。
《聞き手F》 ああ、そう。女性に？
《Nさん》 女性ばっかりじゃなくて、年寄りにも。子どもらにも。」（p186）

この日の聞き取りでも、Nさんは開口一番、「岡村さんは命の恩人だあ、オラあ、ほんとうに本当にお世話になったでよ」と切り出した。ほかの参加者たちも一斉にうなづいた。

Nさんによると、当時、極貧の生活を送っており幼い娘のAさん（1957年生まれ）を抱えたまま結核に倒れ、ムロとよばれるあばら家で途方に暮れていた。病床の母一人に4歳の娘一人。そこに岡村が訪ねてきた。病気だと告げると、「じゃあ、俺が病院に連れていく」といった。結核なら療養に何年もかかることが確実だった。しかし入院費用もなければ、健康保険にも加入していない。お金の問

題以上に、自分が入院したら一人娘の面倒を誰がみてくれるのかが気がかりだった。

「小さい娘を置いたまま、入院できない」と、N さんはためらった。

その背中を押したのは、岡村だった。「別々にするのはかわいそうだけど、子供の面倒を見てくれる人は俺が探すから」と説得した。岡村は、入院の手配だけでなく、退院後の生活保護の受給から国民年金保険料の免除手続きまでやってくれた、という。

娘の A さんも聞き取りに参加していたが、当時 4 歳だったので「母の入院は覚えているが、岡村さんの記憶はない」という。「母が入院してすぐに岡村さんはいなくなったじゃないですか。ムラでの最後の仕事として、母を入院させてくれたのではないだろうか」と推測する。

長期にわたる入院の間、感染防止の隔離状態で娘と面会もできなかった。退院するときに院長が N さんを呼び出して「娘さんの学校のことは心配しなくていい。子供の支度は全部こちらで持つから」と話した。これは入院した時に、岡村が院長に事情を説明して事前に手配していてくれたからだという。

A さんは「私にとっても岡村さんは恩人です」と繰り返した。2016 年の春、母子二人で都内の寺に岡村の墓参りに行ってきた。「念願だったお墓参りに母と行ってきたんです」と A さんは嬉しそうだった。

『報告書』には、「ジャーナリスト岡村」をうかがわせるエピソードもあった。

N さんによると、岡村が大きな録音機を背負って病院に来て、マイクでインタビューした、というのだ。「ウソは言っちゃいけない。はっきりと受け答えをして」と注意を与えた。

「岡村さんが「N ちゃんなあ、いままで生きてきたなかで、なにがいちばん嫌だったか聞かせろ」っつうことで、「なんでえ？」つったら、「こういうわけで、

○○放送［のラジオ］で［放送するんだけど］、ほんの一秒くらいだから、聞かせてくろ」つって。」 (p186)

岡村昭彦の会編集による『シャッター以前　岡村昭彦発見 No.1』（1990 年）の年譜によると、岡村は 50 年代に「出版流通の仕事や、ラジオドラマを書いたりしていた」と記されている。その仕事として被差別部落の現状を伝えようと試みたのかもしれない。N さんだけでなく、岡村はムラの少年たちにも「録音してこい」と命じていたという。出席者の T さん（73）も「音をとってこい」といわれて重い機材をかついで歩き回ってムラの音を録音したが、「これは使えない」とボツになったことを記憶してる。

岡村はその時N さんに「病院で流すから」と話したそうだが、放送にはならなかったようだ。他の出席者も誰も記憶になかった。どういういきさつで岡村がラジオのインタビューを担当したのか。どういう番組だったのか。その放送がラジオで実際に流れたのかどうかは、確認できていない。

戦中から戦後の混乱期を生き抜いた岡村は、若いうちからさまざまな人脈を築いていて、それを活用していたようだ。

学習院に通っていた当時、軍事教練に反発して菊のご紋付の木銃をたたき折ったという逸話がある。敗戦の 45 年に叔父が学長を務める東京医学専門学校（現東京医科大）に入学するが、学費値上げに反対して 47 年に退学。戦後の混乱期には闇取引などで生計を立てつつ、引揚者を支援した。その後日本共産党に入党し、北海道で山村工作に従事していた時期もある。函館で暮らしたり、九州・筑豊炭鉱の争議に加わったりした末に、東京に戻っている。

ムラに住み込んだ当時、岡村は部落解放同盟のメンバーだった（上記の年譜には「昭和 34 年頃、部落解放同盟に入り、オルグ活動を始める」とある）。だが、

鎌田さんは「組織のメンバーというより、一匹オオカミのように活動していたようだ」と話す。解放同盟の支部が正式に設立されたのは、岡村が部落を去った後の 1974 年のことだ。

部落解放同盟千葉県連合会の『部落解放 20 年の歩み』は、岡村の活動に触れて「状況に風穴を開け、解放運動の兆しを作った」と評価している。「岡村さんは行政に働きかけ、生活改善に取り組んだり、子供たちの教育に力を入れます。また、差別事件の糾弾にも取り組みました。」「岡村さんの活躍により、町では 1960 年代に同和対策審議会が設置されます。」（p14）

町の同和対策課の記録にも、「昭和36年（1961年）に同和対策審議会を設置し、町役場の福祉課（当時）の一部にその係（兼務）を置き、当面の同和行政及び同和対策事業の推進にあたってきた」という記述がある。国の同和対策審議会の答申が出されるのが昭和 40 年（1965 年）だから、町レベルでの行政の窓口設置はそれに先駆けていたことになる。

岡村が地元の人たちと差別解消の運動をつづけていたことが、行政を動かしたのだろう。

警察や行政に対する岡村の姿は、ムラの人々に鮮明な印象を残している。

「一匹オオカミ」と鎌田さんが言ったように、岡村はいつも一人で行動していたようだ。「誰かと一緒に役所に行ったって話は聞いていない」という。

部落で起きた「窃盗事件」で、ムラの若者に対して差別意識を丸出しにして見込み捜査を進めた、と警察にムラの人々が怒りの声を上げたことがあった。この時、岡村は冤罪追及の先頭にたち、最終的には県警トップの本部長に正式に謝罪させたという。

「びっくりこいた。あんな偉い人が頭を下げるなんて考えてもみなかった。いつもこっちが頭下げるのが、逆転しちゃった」（T さん）

岡村がムラの人たちから尊敬と信頼を勝ち取るきっかけになったエピソードである。

一介のオルグにすぎない若者が、どうして県警を相手に渡り合うことができたのだろうか。「行政に勝つには相手よりも知っていないと説得できないって。相手よりも倍のことを知っていないといけないって」と岡村が語っていたのをKさん（66）は覚えている。

だが、彼の知識や弁舌だけでは、説明できない背景もあったようだ。

岡村は三池闘争に参加した際に「部落解放の父」と呼ばれた松本治一郎の面識をえて懇意になっていたらしい。社会党の重鎮で参議院副議長も務めた福岡出身の大物政治家である。「松本さんに私淑してたっていうか、個人秘書のような仕事もしていた」という。

上京してからも松本との関係は続いており、警察や行政との交渉の際には、政界の重鎮である松本の政治力を利用したこともあったようだ。鎌田さんが聞いたところでは、「ムラでひとつしかなかった公衆電話の赤電話から、岡村さんが『松本先生をお願いします』って何回も電話していた」。

○「親分」との出会い

岡村と出会って以来、「親分」と慕っていたのが前述のTさんだ。岡村と最も深く付き合った「子分だ」と自他ともに認める。岡村がムラにきて最初に住み込んだのがTさん宅で、夜は一緒の布団で寝た。頬がこけて、あご髭がぼうぼうで「ヒゲさん」と呼ばれていた岡村は、長いオーバーに長靴姿といういでたちで歩き回っていた。

Tさんによると、岡村がムラに来たのは、勤めていた都内の町工場の同僚でムラのリーダー格だったISさんから「お前は頭が良さそうだから、部落に来て子供たちに勉強を教えてやってくれ」と頼まれたからだった、という。

「語り継ぐ」研究会主宰の福岡は 1976 年にもこの部落で聞き取り調査をしていて、今回提供してもらった当時の音声おこしデータの中で、IS さんが、当時の皮革工場の様子について語っていた。IS さんは過酷な労働で体を壊して退職したばかりだった。

「ちょうど六か月ばかり医者に通っているんですよ。だから、いまはほどんど仕事しねえ。暮れまでは、皮革やってたんです。東京まで通ってたです。ここから。そこの工場はクロムセっていって、革を青い色に染めて、それをだんだん赤とかいろんな色に染め上げていくですよ。その工場は 15 年くらいいました。」

「小さな工場はみじめなもんだ。男は三人しかいねえ工場で、だから、おれ、そこ五年ばかりやった時に、とっかえべえかと思ったけれど、いやいや、いまこの年して、そっちらこっちら歩いたってしょうがない。もうちっとやって隠居するんだと思ったから、どうどうそれで一五年やっちゃった。」

IS さんが言及している「クロムセ」とは、猛毒の六価クロムをつかって皮をなめす工程を指していると思われる。（発がん性も高い六価クロムによる工場労働者の健康被害や土壌汚染は、のちに大きな公害問題となってマスコミでも大きく報道された。）「タンニンの臭気のしみこんだ裸の肉体のぶつかり合い」と書いたように、岡村がIS さんら被差別部落の人と出会ったのはこうした「小さな工場」の労働現場だった。

ムラに来た岡村は最初のうちは毎晩、それぞれの家を泊まり歩いて話し込んで、各家庭の事情を聴いていった。「いろんな家に行っては、よそ者扱いされて皮肉を言われたって毎晩、愚痴をこぼしていた」と T さんは話した。

ながく差別されてきたムラの人々の極貧の生活を変えるため、岡村は色々な事業を始めたが、なかでも情熱を注いだのが子供の教育だった。学生たちを連れてきて、白山神社で「学習会」を開いて子供たちを集めた。ムラの人たちの悲願に

こたえて、部落の子供たちの学力を高めていこうという目的だった。

この学習会で岡村と一緒に教えたのは、戦後に社会福祉の専門家を育成するために新設された日本社会事業大学の学生たちだった。同大学は東京・原宿の岡村の実家に近い海軍将校会館で 46 年に日本社会事業学校として開校した。大学の HP は設立の経緯を以下のように記している。

連合国軍最高司令部（GHQ）は戦後改革において、憲法 25 条の基本理念をふまえて、わが国の社会事業改革の方向を示し、国民の生活維持に対する国家の責任を明確にすると同時に、新しい制度、生活保護法が一定の専門的な訓練を受けた職員によって運営されることを求め、1946（昭和 21）年 10 月に予定された生活保護法の施行にあわせて、社会事業の専門的従事者養成のための学校設立を強く促した。

これを受けて同年 7 月、厚生労働省（旧厚生省）は準備に着手し、1946（昭和 21）年 10 月 7 日、中央社会事業協会が経営する日本社会事業学校が誕生した。これが日本社会事業大学の直接的な前身である。（中略）日本社会事業大学は 1958（昭和 33）年 3 月 12 日、日本社会事業短期大学からの昇格が認可されて設立された。

学校でいじめの標的にされる部落の子供たちは、よく脱走して岡村の手を焼かせた。学校に行ったふりをして「山学校」と称してそのまま野山で一日遊んで過ごして、下校時間になると素知らぬ顔で帰ってきていたという。学校給食がなかった当時、弁当をもっていけなかったり、弁当の中身をからかわれたりして、登校拒否、当時の表現では「長欠児童」になっていく子供が多かった。

こうした子供たちを毎朝、岡村が整列させて学校まで送っていた。

「終戦後、岡村昭彦君がきてた昭和三六年ごろでも、まだ長欠児童が二〇名ちょっと越していたんですよ。岡村君は、朝、ぜんぶ並ばして学校へ送っていく。

すると、行ったのがもうすぐ何名が逃げ帰ってきたりということがあったわけです。」（『報告書』p139）

こういう背景を背負った子供たちを対象にしていた「学習会」の活動は、授業の補習だけではなかった。

中学生だったTさんが夏休みの自由研究として、岡村から与えられたテーマは「土地持ちと土地借り」だった。部落の各戸を一軒一軒訪ね歩いて、田圃や畑の持ち分について聞いて回ったという。子供たちにも社会の矛盾を教えようという狙いから、時にはこうした社会調査も行わせていたようだ。

Tさんが岡村を「親分」と呼ぶのには、理由があった。

岡村と出会うまで、Tさんはヤクザにあこがれていた。知人が組員となって「背中に入れ墨を入れてたのがカッコよくって、いつも綺麗な女の子を連れていたから。ヤクザになりたくてしょうがなくって。岡村さんと会わなかったら、たぶん……」と苦笑しつつ、「読書するようになったのも岡村さんのおかげ」という。成人して都内の広告会社に就職できたのも岡村の口利きだった。

その後、Tさんはムラを出た岡村と連絡が途絶えたが、偶然のきっかけで再会を果たすことになった。六本木の書店で手にした雑誌「PHPインターナショナル」に岡村の写真ルポが掲載されていたのだ。

急いで編集部に連絡先を訪ねたら、静岡県舞阪町の岡村の実家の電話番号を教えてくれた。一回目の電話では本人は不在で姉が出た。突然の電話に、姉はすこし警戒していたようだったという。二回目は、電話口に本人が出た。

「Tです」。緊張気味に切り出すと「誰だ、お前は？」とぶっきらぼうだった。もう一度、名前を繰り返すと「なあんだ、お前かあ」と懐かしそうな声に変わった。都内で再会した岡村は「えらいご機嫌で、今度は舞阪へあそびに来い」と、

新幹線の自由席切符二枚を手渡して、「講談社から（切符を）せしめてきたんだ」と実家に招いたという。

この再会をきっかけに、二人は昔のように家族ぐるみでつきあう仲になった。岡村が海外出張する際は東京近郊のTさん宅に泊まって、翌朝Tさんがトラックで空港まで送っていくのが習慣になった。

〇カメラを質屋に

海外取材のときの岡村のカメラをめぐる興味深いエピソードもTさんから聞いた。

「羽田に皆で見送りに行った。ベトナムに行くとき。そのとき、岡村さんのカメラをうちの母が質屋にいれちゃった（笑）。俺が岡村さんから預かっていたカメラが家にない。『（カメラは）どうしたの？』っていったら、母親は『ちょっと……』っていうんだ」

結局、岡村は手持ちのカメラを持たないまま、羽田空港から飛び立っていったという。

岡村が海外取材に自分のカメラを用意していたという話は意外だった。

なぜならカメラについては、初めてバンコクへ赴任する途中に香港でライカを購入したエピソードが伝えられていて、「カメラの使い方も知らないでカメラマンになった」というのが「岡村伝説」の一つになっている。実際、PANA 通信特派員として最初に送信してきたボクシングの写真は使い物にならない出来ばえだった。

「岡村昭彦がPANA通信と契約してバンコクに向かったとき、彼は写真についてはまったくの素人で、カメラをいじったこともなかったというのが定説になっている。彼はバンコク支局に向かう途中、香港に立ち寄り、ライカ M3 型を買っ

たが、フィルムの詰め方がわからなかったので、同僚に尋ねたという。それでも、彼は平然とこういうのだ。『確かにフィルムの詰め方は知りませんでしたが、何にレンズを向けるべきかは知っていました。だから、私はプロでした』」

（『「将軍」と呼ばれた男』、玉木明著　p46）

鎌田さんは、岡村が購入していたカメラについて「アサヒペンタックスですよ」と指摘した。ロングセラーになった国産小型カメラ「アサヒペンタックス」シリーズは 1950 年代末に生産が始まっている。母親が質に入れたカメラがその後どうなったかは、T さんも記憶にないそうだ。岡村もカメラの行方にはこだわらなかった。

○「岡村街道」

集会所での聞き取りを終えて、地元の人たちが「岡村街道」と呼んでいたという道に向かった。小さな駅の裏手には高台を一部切り開いた宅地が開発されている。整然とした区画には雑草が生えている。その駅から高台の竹林を囲むように狭い道が地域の神社に向けて続いている。

都内に通う通勤・通学路だった道だが、当時は舗装もされていない湿地で、雨が降ると水たまりだらけで人々は難儀していた。「夜は明かりもないし、よくこんなところを歩けるな」と岡村は、燃えかすの石炭ガラを集めて道に敷き詰めていく工事を始めた。人々も作業を手伝って、雨が降っても足が濡れないようになったという。その功績をたたえて、当時はこの道を「岡村街道」と呼んでいた。

実際に歩いてみても当時の様子を想像するのは難しい。高台側から流れてくる水によって今も道路が濡れていた部分があった。「昔は、道の全部がこんな感じだったんだな」と鎌田さんは指さした。鎌田さんが住み始めた 70 年代には、あちこちにコンクリート製のU字構が山積みにされていたのを覚えている。地元の要請をうけて、行政による生活排水を流す側溝工事が始まった時期だった。同和

対策が本格化したことで住宅や道路、下水道などの整備が進んで、ムラの生活環境は向上した。周囲の風景は一変したが、「岡村街道」は人々の記憶に刻まれていた。

○姿を消した岡村

なぜ岡村がムラを出たのだろうか？　彼が部落を出ていったときを覚えている人は、6 人の参加者にはいなかった。

N さんは結核で入院中だった。T さんも「岡村さんはいつ出てったのか、わかんなかった」と言う。「追放されたんだ」というショッキングな言葉を使った人もいた。

ひとつは、養豚事業をめぐるトラブルに巻き込まれたという話だ。

岡村の呼びかけで、ムラの一角に豚小屋ができて 2，3 匹の子豚の飼育が始まった。各戸から出る残飯を利用して交代で世話をする共同事業だったらしい。「ブタを飼えばもうかる」という話が広がり、一時は養豚ブームが起きたようだ。K さんの記憶では、材木屋の父から木の切れ端をもらってマキにして、えさとなる残飯を釜で煮込んでいたという。

だが、成長したブタを売却するときになって、その売買代金をめぐってトラブルが起きた。「ブタ売った銭を貸したら、返ってこなかったんだよ」と N さんは振り返る。

「その泥を、岡村さんが全部かぶったんだ」と T さんは断言した。

名門の出身で、「戦後も闇ドルの両替で大儲けした」（T さん）という岡村は、自分の蔵書を売りさばいて手持ちの資金を作っていた、という証言もある。

「追放」の背景には、新参のよそ者がリーダー格となっていくことに対する一部の反発があったようだ。子供たちの教育から排水構の建設、養豚と次々に人々を巻き込んでいく若き活動家。世話になった人からは「英雄だ」と尊敬されていたが、ムラの秩序を乱すと反発したグループもいたらしい。

地元でのトラブルについては、別の証言もある。

部落の若者が警察沙汰になった事件があり、週刊誌の記事に部落の様子が差別表現まじりで大々的に報じられたことがあった。記事には地元の事情が書かれていたため、「岡村が（週刊誌に）チクったのではないか」という疑惑が広がり、一部の人から白山神社に呼び出されてつるし上げをくったという。岡村は、捕まった若者に弁護士の手配をしたり、警察の取り調べに「絶対にしゃべるなよ」と助言したりして支援に奔走していたという。「密告者」呼ばわりされたことにはつらい思いを抱いたことだろう。

○転職と上野英信との出会い

そんな折に、労働組合の全国組織・総評（日本労働組合総評議会）が 1961 年に創刊した週刊誌『新週刊』の編集部から声がかかった。その経緯は『新週刊』編集長だった加藤子明が説明している。

この被差別部落を取材した折に「そこで、アゴヒゲをはやした大男のオルグ、岡村君を知ったのです。ぼくは彼の仕事ぶりをみて、すっかりほれこんだ。強引に連れてきて、『新週刊』の編集部員にしました」

（『南ヴェトナム戦争従軍記・岡村昭彦集 1』解説）

1962 年夏から、岡村は『新週刊』編集部に勤め始める。その仕事を通じて、筑豊の上野英信やカメラマン土門拳などのジャーナリストや写真家たちと出会うことになった。

上野英信は、岡村との出会いをこう回想している。

「初めて出会った当時、彼は総評の発行する『新週刊』のグラビア・ディレクターとして働いていたが、後年のたくましい風貌からは想像もできないほど、痩

せて蒼い顔をした、見るからに神経質な感じの青年であった。まるで覆面をしたような黒い長いひげで包んだ顔に、眼だけが異様にきらきら輝いていた。私など、この男はひょっとして右翼かぶれの文学青年ではあるまいかと疑ったほどである」
（同、p476）

岡村は上野と「飢餓の嵐の吹きすさぶ筑豊炭田の小ヤマを歩きまわ」り、何度もルポルタージュを依頼した。これをきっかけに、岡村は上野を深く慕うようになった。

岡村がベトナム戦争の取材を真剣に考え始めたのは、この時期のことらしい。
上野は岡村について、「会うたびに熱っぽい口調で南ベトナム行きの計画を語った。そして、私にも同行を勧めた」と回想している。

『新週刊』は62年に廃刊となった。その秋にPANA通信社（Pan-Asia Newspaper Alliance）に入社する。PANA 通信社は、戦後占領期から中華民国の中央通信社の東京特派員として駐在していた宋徳和（ノーマン・スーン）によって 1949 年に設立された。「アジアの、アジア人による、アジアのための通信社」を目指して、「アジアのジャーナリストたちが一緒におこした、おそらく史上初の事業」（岩間　2017 年）という。アジアに独自の取材網をもちベトナム戦争報道などで実績を残したが、時事通信社の傘下に入り 2013 年に「時事通信フォト」に社名変更している。
岩間によると、PANA 通信への入社は、岡村の学習院時代からの幼友達だった共同通信の犬養康彦の紹介だった。タイ人の恋人のいるバンコクでの取材を熱望した岡村は、社長に「給料を返上して自腹を切ってでも取材したい」と直訴を続けた。社長も根負けしてシンガポール支局長だった陳加昌と相談した。陳は政情が不安定になっていた南ベトナム行きを進めたが、岡村は自分の希望を通して

62 年 12 月にバンコクに赴任した。

特派員としての初仕事は、バンコクで開催された人気ボクサー・ファイティング原田の世界フライ級王者防衛戦だったが、岡村の写真はピンボケでどれも使い物にならなかったという。

○南ベトナムへの赴任

ラオスの残留日本兵の取材を経て、岡村が南ベトナムを初めて取材したのは 63 年 7 月だった。

当時の南ベトナムは、独裁色を強めるゴ・ディン・ジェム政権への仏教徒の反政府運動が盛り上がり騒然としていた。前年には南ベトナム解放民族戦線が第一回大会を開催する一方、米国は首都サイゴンに軍事援助司令部（MACV）を発足させて、アメリカの軍事顧問が政府軍を直接に指揮・支援することになった。南ベトナムの「内戦」が、米国を巻き込んだ国際紛争に転換していく時期だった。だが日本の報道各社は、まだサイゴンに常駐特派員を駐在させていなかった。岡村はサイゴン支局を開設して、いち早く南ベトナムの現地での取材を始めた。岩間によると、『サンデー毎日』掲載の仏教寺院への弾圧ルポを皮切りに、日本の主要メディアに PANA 通信を通じて、岡村の記事や写真が掲載され始めるようになる。

そんなとき、世界のカメラマン憧れの米国の写真グラフ誌『LIFE』が特集「A little war, far away ― and very ugly」と題して 1964 年 6 月 12 日号で、岡村の写真ルポを一挙に掲載した。「国際報道写真家 OKAMURA」の登場だった。

その掲載の経緯も、エピソードに彩られている。

PANA 通信の担当者によると、戦場の最前線を取材した岡村の写真を一括購入を条件に、朝日、毎日、読売の特約 3 社に売り込んだが、「これはスクープだ」と判断したのは毎日新聞の大森実外信部長だけだった。その大森も「残念だが、上の連中が一括買い上げを決めるまで時間がかかりそうだから、今回はパスする」

と見送った。

同じ「all or nothing」という条件で、『LIFE』東京支局長に写真を見せたところ、二つ返事で100点を超える写真を一括購入した。しかも「特集の表題に “ugly war” の表現を含むこと」という岡村がつけていた条件も受け入れたうえ、通常の二倍の掲載料という同誌最高のレートを払った。（岩間　2017 年）。

日本の主要メディアにはボツとなった無名のジャーナリストのルポ写真だが、ニュース写真誌として最も影響力のあった『LIFE』が「キャパの後継者」と評価したのだった。日本のベトナム報道をリードして、のちにライシャワー駐日大使から圧力をかけられた大森が、岡村ルポの価値を認めながら掲載の見送りを決めたのも、皮肉なめぐりあわせだ。（大森　1971 年）

『LIFE』に掲載された写真は、血まみれで息を引きった米軍中尉の遺体や、政府軍陣地に突入しようとした解放勢力兵士の死体、政府軍の拷問を受ける農民の姿など生々しいものばかりだ。「醜い戦争（ugly war）」の実相を世界に伝える、という岡村の視点が鮮明に表れている。米国でもこの時点で、ジョンソン政権が掲げる「共産勢力から同盟国を守る」という大義に疑問を呈していたジャーナリストは例外だった。のちに『ペンタゴンペーパーズ』（国防総省機密報告）のスクープを放つニール・シーハンも 1964 年に最初のサイゴン赴任を終えた時点では「問題はあっても戦争は正しいと信じていたタカ派」だったと回顧している。『ベスト・アンド・ブライテスト』の著者となるデービッド・ハルバースタムが、サイゴン特派員を終えて『泥沼の誕生（The Making of Quagmire）』を出版したのは 65 年のことだ。（水野　2005 年）

この『LIFE』誌の掲載直後の 64 年 8 月、米艦が北ベトナムから魚雷攻撃を受けたとされるトンキン湾事件が起きた。米ジョンソン政権は報復として北ベトナムへの攻撃に踏み切る。翌 65 年から北爆が本格的に始まり、ベトナム戦争は世

界の焦点となっていく。このルポは、世界のジャーナリズムにとっても「先駆け」のスクープだった。

この掲載をきっかけにして、日本の主要メディアもベトナム報道に熱をいれて取り組み始めた。戦争のエスカレートとともに「戦争報道の草分け」として脚光を浴びた岡村は 64 年 11 月に講談社写真賞を受賞したのを皮切りに、65 年に芸術選奨文部大臣賞、アメリカ海外記者クラブ最優秀報道写真年度賞、日本写真協会年度賞と次々に受賞を重ねて、「時の人」になった。

なかでも『LIFE』誌 65 年 7 月 2 日の南ベトナムの解放区の潜入ルポ「ジャングルのヴェトコンの生き地獄からの生還」は、ベールに包まれていた解放戦線のファト副議長との単独会見を異例のイラスト入りで伝えるスクープだった。この取材は 66 年に『続南ヴェトナム戦争従軍記』として岩波新書で刊行された。このため、岡村は南ベトナム政府から 5 年間の入国禁止処分を受ける。

LIFE 誌の契約フォトグラファーとなった岡村について、同誌の写真部長だったロン・ベイリーは以下のように評価している。被差別部落でも、ベトナム取材でも、岡村が同じスタイルを貫いていたことがよくわかる。

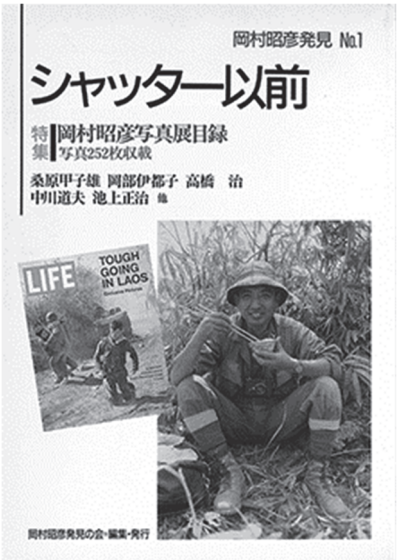
「他のカメラマンと違って岡村は、こちらから指示した仕事を手掛けたことは一度もなかった。彼は自分で取材の内容を決め、それを私たちのところに持ち込んできた。」

「岡村は、その仕事のスタイルにおいてもまた型破りであった。『LIFE』の場合、たいていのカメラマンは、レポーターと組んで仕事をするのだが、岡村はいつも自分一人で、しかも他の者とはまったくちがったやり方をした。最初の大仕事となった東南アジアの戦場での取材のときなどは、彼ははだしで、しかも自分が日本人であって“敵”ではないことを示すため、日の丸の旗を掲げた竹ざおを肩にくくりつけて、ラオスのゲリラの占領地に堂々と乗り込んでいった。ベトナムでは、自分の狙った記事を書くために、ベトコンの捕虜にまでなったほどだ。」

「彼は現地の人々と同じものを食べ、そしてお互いに友人同士となったのである。必要であるからそうしたのではない。それが岡村の選んだ道であったのだ。」

（「型破りの男」、『岡村昭彦報道写真集』p5）

71 年にも『LIFE』誌に、“War in Laos”と題した写真ルポを掲載。ベトナムの隣国ラオスで進められていた極秘の侵攻作戦をスクープした。このルポは、従軍していた南ベトナム政府軍の装甲車が地雷で爆破された瞬間をとらえた迫真の記録である。北ベトナム軍をおびきだすための極秘作戦だったので報道管制も厳しく、前線で取材したのは食料トラックに忍び込んだ彼一人だった。装甲車から投げ出され負傷した兵士たちが抱き合い、放心したように膝をついている写真は、同誌 3 月12日号の表紙を飾った。同誌 3 月 26 日号、4 月 2 日号にも連続して写真を発表し、岡村の写真は年末の同誌の年間写真選にも掲載されている。



Copyright©2002-2021 岡村昭彦の会 All rights reserved.

このルポの経緯について、ベイリー元写真部長はこう振り返っている。

岡村が、ひとたび仕事にとりかかると何か月もの間、私たちは彼がどこで何をしているのか、まったく知ることはできなかった。例えば、1970年6月に彼がひょっこりニューヨークに姿を現した時のことを私は覚えているが、なんとそれまで彼は、内戦の続くビアフラの前線深くもぐり込んでいたのである。

彼は次に、ラオス内紛の取材を望んでいた。（中略）彼の場合は何も質問しなかった。私は彼を信頼し、ラオスの首都ビエンチャン行きの航空券と、わずかなギャラを渡すことに同意したのである。

約8か月間、岡村については何の消息も聞こえてはこなかった。そして彼は、当時の編集局長ジョン・シアーの言葉をかりるなら、「世界を震撼させる20本のフィルムを携え、ライフ社への信義を夢にも違えることなく」ライフ社のサイゴン支局にその姿を現したのである。(『報道写真集』p6)

こうした苛烈な戦争取材の合間に、岡村は部落の人に署名入りの自分の写真や絵ハガキなどを送ることがあった。

『南ヴェトナム戦争従軍記』では、少女K子からの手紙を紹介している。

――《村もすっかりかわりました。下水の掃除にもみなが協力するようになり、社会事業大学の学生さんたちも、土曜日には必ずお宮に泊まり、子供たちに勉強を教えています。みんな岡村さんがどうしているか、丈夫でいるか心配しています。（中略）

とても上手に字が書けるようになったでしょう。部落解放のために一生懸命にやった虎さんじいは、このあいだ脳溢血で死にました。岡村さんからの手紙をとても大切にしていましたよ。》 (p120)

『続南ヴェトナム戦争従軍記』では、その“虎さんじい”を「私にとって民族

の誇りをはじめて自覚させた父」とまで呼んで、潜入していた南ベトナムの解放区の村の指導者「N 政治委員」にその面影を重ね合わせている。

私がはじめてこの村（筆者注：南ベトナムの解放区Dゾーンの村）の農家に泊まった翌朝、彼は私の宿代の相談に答えて、どんな貧しい家でも一晩の宿と食事は与えられるものだ、とさわやかにいってのけたが、こんな真実の生活の言葉は、誰でも使えるものではない。私はそれとまったくおなじ糸で編まれた言葉を、未解放部落の老人から教えられたのを思い出す。部落解放運動に私の眼を開かせてくれたその“虎さんじい”は、無報酬で村の複雑な差別問題と取り組んでいる私の空腹を救うために、頭をひねって一枚の名簿をこしらえた。一食一軒あての一週間分の家の名を書き並べたその紙きれを私に示しながら、虎さんじいは、＜一軒の家で三食つづけて食わせることになれば、人情としてあぶらげの一枚も、よけいに買うことになる。そこに無理がくる。どんな貧乏な家でも一食ならば、家の者とおなじに、余分の負担なしに食わせられるものなんだ＞と諭した。身をもって日本の歴史がいかに民衆の屈辱にみちたものであるかを教えてくれた彼は、私にとっては民族の誇りをはじめて自覚させた父ともいうべき人であったが、この解放戦線のN政治委員もやはり、ヴェトナム民族の長いたえがたい歴史の息子であるにちがいない。（p143）

部落の住み込み体験やその人々との交流が、岡村の「戦場ジャーナリスト」としての姿勢を支えていたし、その姿勢はどこの取材でも変わることがなかった。ただ、これだけ深くかかわった部落を、その後の岡村が再訪したという記録は見当たらない。

T さんは、移転する前の東京・有楽町の朝日新聞東京本社にあった PANA 通信に連れていかれたことがある。その時も、岡村はムラに住み込んでいた時のよう

に「コートに長靴姿でヒゲ面だった」という。「エレベーターで上がってのこのこ入って。すげえとこに入っていきやがんなって」。

ムラへの訪問についても、外国に出発する岡村をTさんがトラックで成田空港に送っていく途中に、「見てみる？」「行ってみるか」という話になり、二度ほど立ち寄ったことがあるという。

その時は誰を訪ねるわけでもなく、新しく建った家などを見せてムラをぐるっと回ってみただけだった。Kさんも一回、夜に暗くなってから空港に送っていく途中で岡村とムラを回った記憶があるという。「昼間、堂々と歩いていくような形ではなかった」と振り返る。

「（ムラを）訪ねるならキチンと行かないとな。今はいかれない」と岡村は話していた。

懐かしかったはずのムラを回りながら、岡村の胸にわだかまっていたものは何だったのだろうか。

岡村は85年に都内で死去した。その一周忌に、Tさんたちが呼びかけて部落で「偲ぶ会」を開いた。ムラの人たちの心づくしの集まりだった。岡村の写真展も部落の人権センターで開き、その後、都内の会場でも開いた。「展示した写真が多過ぎるって言われたけど、親分の気持ちを考えたら、できるだけみせてやりたいって思ったんですよ」とTさんは話した。

（本稿は、岡村昭彦の会HP（ウェブサイト https://akihiko.kazekusa.jp/official/）に掲載されたフィールドノートに加筆したものである。聞き取り協力者は匿名にしているが、機会を与えてくれた福岡、黒坂両氏を含めて皆さんに感謝します。千葉県人権センター常務理事の鎌田行平氏は2021年に逝去されました。）

【聞き取り調査】　2016年6月12日

【参考文献】

『石に書く』（大森実　1971 年　潮出版社）
『ライカでグッドバイ』（青木冨喜子　1981 年　文芸春秋）
『岡村昭彦報道写真集』（岡村春彦・暮尾淳監修　杉岡博隆・米沢慧編集　1986 年　講談社）
『南ヴェトナム戦争従軍記　岡村昭彦集 1』（1986 年　筑摩書房）
『シャッター以前 Vol.1』（岡村昭彦の会＝編集・発行　1990 年）
『「将軍」と呼ばれた男』（玉木明　1999 年　洋泉社）
『戦争報道論』（永井浩　2014 年　明石書房）
『千葉県 A 市・B 町における同和教育実態調査報告書』（A 市人権教育推進のための調査研究委員会 2006 年）
『部落解放 20 年の歩み』（部落解放同盟千葉県連合会　1994 年）
『岡村昭彦と死の思想―「いのち」を語り継ぐ場としてのホスピス』（高草木光一　2016 年　岩波書店）
『水俣を伝えたジャーナリストたち』（平野恵嗣　2017 年　岩波書店）
『PANA 通信社と戦後日本』（岩間優希　2017 年　人文書院）
「アジアの、アジア人による、アジアのための通信社――『PANA 通信と戦後日本』著者インタビュー」（岩間優希　2017 年 11 月　日本写真エイジェンシー協会 HP）
「アメリカにとってのベトナム戦争」（水野孝昭　2005 年　めこん『ベトナム戦争の戦後』所収）